

特別寄稿

「生涯武道」でマレーシアに暮らす

松濤館流拳心会 谷田 茂

「人生80歳」と言われていたが、最近では「人生100歳時代」と言われるようになり、戸惑っている人もいないでしょうか。テレビを見ていると90歳以上の元気な高齢者が出てくる。大変喜ばしいことではあるが、急に20年も寿命が延びてくると、「如何に生きるか」が、問われることになる。生き甲斐もなく生き続けることは、幸せなこととは言えません。「余生を与生」とらえ、積極的に考えては如何でしょうか。海外では、指導者として日本の武道家が望まれている国が沢山あります。定年退職後、マレーシアに移住して、空手三昧の生活を送りながら、考えた「生涯武道」の提案をさせていただきます。



1 なぜ海外で空手指導か

仕事で海外出張の時には、空手着を持って出かけた。日本から事前に紹介されたり、現地で繋がり^{つな}りの出来た空手家や空手道場を訪ねた。

30歳代の時に、ロスに本部道場があり、世界17カ国に支部を持つ、米松濤館の大島勅先生と知り合った。大島先生が、サンタバーバラに自宅と道場を建設された時に、家族と共に日本から訪問した。太平洋を見下ろす丘の中腹にある素晴らしい環境で庭には数人の庭師と思われる人が働いていた。何気なく話していると大島先生の弟子だった。「先生がロスからこちらに來られたので、仕事をやめてこちらに引越しをして、現在仕事を探している」と言われた時はビックリした。

経済状況は、今ほど厳しくなかった時期だが、現地の人から尊敬の念を持たれて、現地で活動している姿に感動した。私もビジネスを通じて「感謝」されることは多々あったが、「感動」を与えたことはなかった。仕事を辞めた後は、海外で空手を教

えながら、暮らそうと考えた。

2 なぜマレーシアか

よく聞かれる質問は、「なぜ、マレーシアですか?」。2006年36年勤務した会社を退職した時に、最初に考えたのは駐在経験のあるアメリカ。長く海外に住むためには、現地のビザが必要。しかし、9・11のテロが発生してからは、高度技能者でもない限り、長期のビザは発行されない。退職した時は、「シルバープラン」と言って、通産省が気候温暖で物価も比較的安いスペインへの移住を、推奨する計画を発表して話題になっていた。しかし、ヨーロッパへの移動は時差があり、年配者には向かない。今、スペインに多くの退職者が住んでいるとは聞かない。

そうすると、日本から近い東南アジアになる。当時、タイは物価も安く、ビザの取得制度も確立している。多くの退職者が移住している。

しかし、英語の普及度が低く、外国に住むには生活情報の入手が重要で、タイ語が話せないと本当の生活

は楽しめない。フィリピンは英語圏であるが、外国人が住むには治安が悪い。オーストラリアも退職ビザがあり、多くの日本人を含む外国人が移住したが、退職者ビザが投資ビザとなり、1億円ぐらいのお金を用意しなければならなくなった。

3 マレーシアとは

マレーシアは、マレー系(60%)中華系(30%)インド系(10%)の多民族・多宗教国家。2007年、私が移住してきた時のマレーシアの人口は2700万人。10年経って現在では3200万人。2050年には6000万人になると推定されている、今後も成長が期待されている東南アジアの国。

産業は、石油、パームオイル、木材等が豊富な資源国家と「ルックイースト政策」で日本、韓国の技術を導入して成長している中進国で、2020年先進国入りを目指している。ここ数年、経済成長率は6%を超えている。産油国なのでガソリンの値段は、サウジアラビアに次いで

安いと言われている。マレーシアでは、政府が積極的に移住を奨励している、簡単な条件で10年ビザが取得できる。

4 充実した空手指導者としての人生

2006年12月にマレーシアに移住し、2007年3月に日本人会空手部を設立したので、2017年に



日本人会空手部 10周年記念大会

10周年記念大会を実施した。日本人企業の駐在員の子弟が多く、3〜4年で帰国するが、今までに250名近くの生徒に教えた。永く続けているのは、両親のどちらかが日本人で、こちらに永住しているハーフの子供。海外に永くいると、両親に武道の経験はなくても、子供には日本の伝統文化に触れる武道を習わせたい。いつか日本に行った時に、子供が恥ずかしくない礼儀作法を身につけて欲しいと思っている。日本で子育てをしている日本人で、これほどの矜持(きんぢ)を持っている親がいるだろうか。

マレーシアでも、大部分の子供は自分から空手をやりたい、と言って入ってくるわけではない。親が「やらせたい」、親が「もつとメンタルが強くなって欲しい」と願って通わせてくる。入って来た子供に如何に興味を持たせて、自分で稽古するようになるかが課題。

親の真剣な態度や眼差しを見てみると、こちらは責任感と遣り甲斐(がひ)を感じる。小学生、中学生から空手を始めた生徒は、体の成長に伴って、空手の技量が突然開花する。生徒の成長は何ものにも代え難い喜びで、

空手を教えていなければ味わえない。

5 空手（武道）と宗教

世界には様々な宗教があり、日本以外の国の宗教は一神教で、強い信念と信仰に基いて生活をしているが、他の宗教は認めないという争いも起こしている。日本の武道は、神道とも深く関係しており、正面に神棚があり「神前に礼」。教えて頂く「先生に礼」。一緒に稽古をしてくれる仲間に「お互いに礼」の「三礼」。しかしグローバルスポーツとなった空手では、世界に様々な宗教があり、日本の神である「神前に礼」はそぐわない。

またマレーシアでは、多目的ホールを使用しており、正面に神棚はない。「神前に礼」の代わりに、「正面に礼」をしている。正面とは何か。全ての武道の先人に対する礼。幾万人もの先人が、生涯をかけて、空手を伝えて頂いている。そのお陰で、マレーシアの地でも、沢山の方が入門して来る。先人一人一人に、お礼

は申し上げられないが、私の指導を受けた者が、世界のどこかでまた、次の者に空手を伝えてくれることで、私が頂いた恩の「恩送り」を心がけている。

6 モーリシャス空手道連盟 セミナー

アフリカ、マダガスカル島の東側のインド洋にモーリシャス共和国という小さな島がある。そのモーリシャス空手道連盟から招待を受けた。モーリシャス空手道連盟には、39の

道場が加盟しており、松涛館26、沖繩小林流8、沖繩剛柔流4、糸東流1があり、人口130万人に対し約10万人の愛好者がいる。昨年8月、2週間全島を回り、7道場300名の受講者を得た。現地新聞にも3回報道され、稽古の様子がスポーツ誌に報道された。見出しは「今まで習ったことのない技を教えた」と書かれてあった。ヌール副会長が私の最初のセミナーを見た感想は、「丁寧に教えている」だった。今まで有名な空手の先生が来ても精々3日で、内1日



モーリシャススポーツ新聞で紹介される



モーリシャス空手道連盟国際松涛館支部

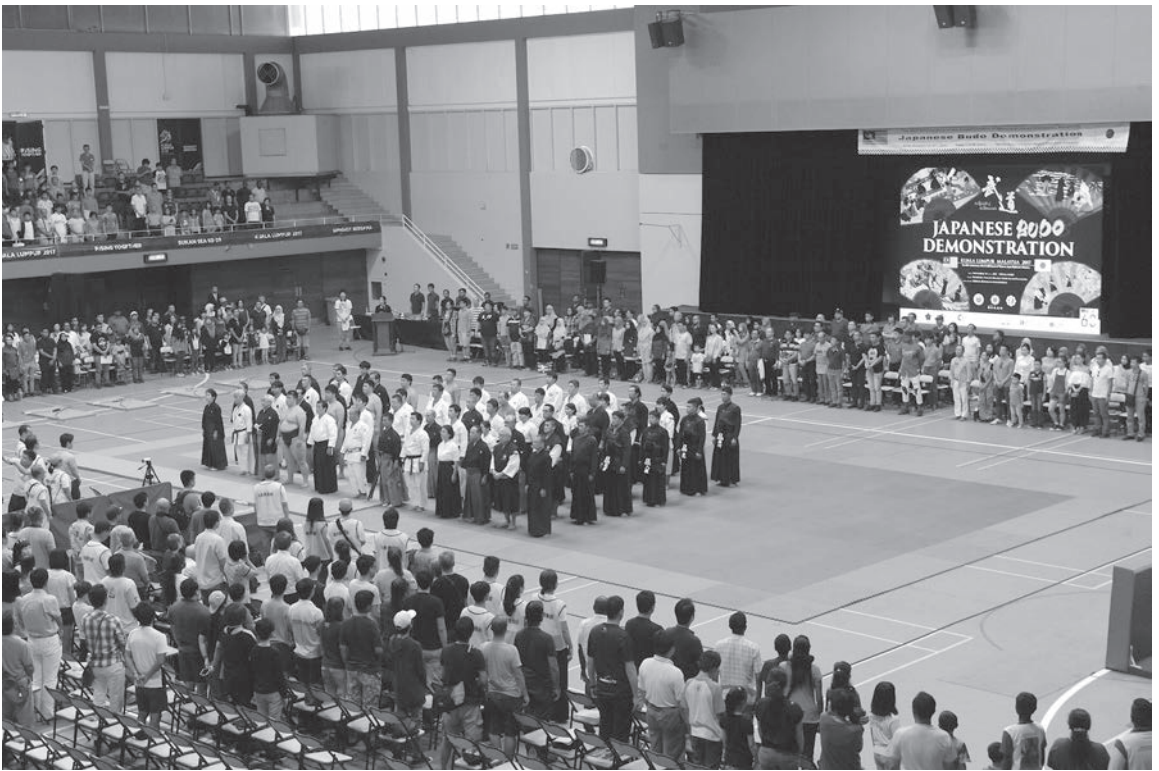
はゴルフをして帰っていると言っていた。2日間では教える内容にも限度がある。地元で根付いて、武道を教える日本の指導者が望まれている国が、沢山あると痛感した。

稽古の後には、毎回写真を一緒に撮って欲しいと囲まれる。稽古の後、5人の女子高校生に囲まれた。彼女達もいつかこの小さな島を出て、大学に進学、また仕事で、シンガポール、オーストラリア、フランスに行くかもしれない。その時は、私がマレーシアに来た時に体験したよう

に、一人も知り合いのいない土地に降り立つことになる。しかし空手（武道）を続けていけば、すぐに友達を見つけて、その土地に溶け込める。何故なら、空手の愛好者は、全世界に1億人いるからである。

7 私にとっての日本武道団 派遣イベント

2017年11月に、日馬外交樹立60周年を迎え、日本武道館主催で日



マレーシア派遣日本武道代表団演武会 開会式

本武道代表団が派遣され、演武大会が行われた。演武を披露したのは現代9武道と3古武道で、総勢約75名の団員が、日本の伝統文化である武道の真髄を披露した。

今回、このイベントの日本側とマレーシア側のコーディネーターの委嘱を、日本武道館から受けて活動した。日本武道館から頂いた資料は、なぎなたと相撲を除くマレーシアの7武道団体の連絡先。早速、各武道団体と連絡を取り、実行委員会を組織。マレーシアでも同じ武道仲間でも、普段は連携がとれている訳ではない。このイベントを通じてお互いの協力、親睦関係が図れて、沢山のボランティアの申し込みを頂いて、成功の大きな原動力となった。

物事を成し遂げるには、「天の時、地の利、人の和」が必要と言われている。私は、11年前の2006年12月にマレーシアに来たが、その翌年の2007年に日馬外交樹立50周年記念として、今回のイベントが企画されたら何も出来なかったし、また私にコーディネーターの話は来なかっただろう。正に2017年は、私にとって「天の時」であった。10年

間マレーシアに住んでいれば、マレーシアの政治、経済事情と生活体験を持っているので、「地の利」を得ていたと言える。今回のイベントを通じて、日本からの派遣団の先生と地元武道団体のボランティアと交流が図られた。特に銃剣道の方々は、日本の先生との交歓稽古は初めてで、感激されていた。1人では何も出来ない。マレーシアでも「人の和」の大切さと有難さを痛感した。

今回の演武大会の1つの会場が、幼稚園から中学校まであるクアララルンプール日本人学校で、約1000名の生徒と保護者の前で日本の武道を披露。宮谷校長より「海外で初めて体育の教科に武道を取り入れた」と表明があった。武道をあまり知らない生徒たちが嬉々として演武を見学し、武道体験会では沢山の子供が大喜びで参加した。

海外で暮らす日本人の子弟に武道を教えることは、大変意義のあることだが、ここでも指導者の不足が問題になっている。外務省、文科省、日本武道館のサポートを得て、マレーシアの地で武道を根づかせていくと欲しいと願っている。



空手道演武

在マレーシア日本国大使館附属クアラリン
プール日本人会日本人学校にて



解団式で柔道の光本健次先生が、「私は、いつもこの演武会が、自分の人生の最後の演武会だと思ってる」と言われたが、このような方に初めて出合い、素晴らしい心構えだと思った。

8 「生涯武道」の実践

日本武道派遣団のマレーシア側の

パートナーは、マレーシア政府の「青年・スポーツ省」で、イギリスの行政組織の考え方の流れを汲む。日本の組織は「スポーツ庁」であり、日本では「青年」という文字がない。これは西洋と日本では、スポーツ（武道）に対する考え方が異なっている、西洋では青春のある一時期にスポーツをすると考えているようだ。

しかし日本の武道には「生涯武道」という言葉があり、2つの意味がある。1つは、文字通り生涯を通じて武道に親しむこと。もう1つは何歳からでも、老若男女が武道を習い始めることができるということ。

多くの道場には、柔道（嘉納治五郎）、空手道（船越義珍、合気道（植芝盛平）の近代武道の開祖の、お歳を召してからの写真が掲げられている。老境に入ってから道場に立ち、修練を重ねて身に付けた神技を弟子に指導している。

武道を愛する全ての人が、あらゆるところで「生涯武道」を實踐し、日本の文化遺産である武道の素晴らしさを、世界に発信していくべきだと痛感した。